

WS「連続性と様相」企画趣旨

岡本賢吾 (Kengo Okamoto)

首都大学東京大学院・人文科学研究科

「連続性」あるいは「連続体」と、「様相」（基本的に「様相論理」と言う場合の「様相」である）という語を目にすると、おそらく次のように感じる哲学研究者が少なくないだろう。これらの概念が、論理的・数学的に見て、また哲学的に見て重要なものであることはもちろん理解できる。また、両者の間に論理的・数学的に本質的な結びつきがあるということも、色々の機会を通じて聞いたり読んだりしている。しかし、この結びつきがどのようなものを適切に理解するのはそう簡単ではないし、より重要な問題として、そのような結びつきそのものに何らかの哲学的・形而上学的な意義や興味があるのかは到底明らかではない、と。

こうした印象が生ずるのには、確かにもっともな理由があると言うべきであろう。そこで本ワークショップでは、こうした印象を一掃することは無理にしても、問題の「結びつき」の論理的・数学的側面について判りやすい解説を加えた上で、その哲学的・形而上学的な意義・興味の所在について多少とも積極的・建設的な展望を示すことを目標としたい。具体的には、おおよそ次のような手順で話を進める。

(1)まず、解析学的な連続性（体）が、決して既に終わったテーマなのではなく、本来の論理学・数学の研究において重要な概念分析の主題であり続けていること、そして、そうした分析の結果が、少なくとも可能的には、関連する諸概念についての哲学的分析への本質的影響を持ちうることを、構成主義数学の立場から概説してもらう。

(2)次に、論理との関連に目を転じて、命題論理から様相命題論理までに亘る代数意味論を素材に、そこにおいてどのように位相空間を用いた表現論が重要な働きをするか、さらに、圏論による一般化を介して、こうした表現論が、論理の基礎概念の分析に対してどれほど広範で透徹した見通しを与えつつあるかを解説してもらう。

(3)さらに、哲学史に視野を広げて、主にパースに素材を取りながら、以上のような連続性や様相に関する近年の論理的・数学的分析の発展が、哲学史解釈にどう有効に働くか、また逆に、そこから現代に戻って考えたとき、こうした論理的・数学的分析に含まれる哲学的射程がどう明らかになるかについて、問題提起をしてもらう。

以上に加えて、例えば、クリプキ構造（遷移構造）の形而上学的興味とはどのようなことか、果たしてふつう信じられているような可能世界の实在論問題といったことだけなのか、あるいはまた、連続体の形而上学的興味とはどのようなことか、果たしてふつう信じられているような通時的同一性の問題（四次元主義、等々）といったことだけなのか、についても考えてみたい。